

## 外国人児童生徒の学校生活における支援ニーズ及び支援方法

Support Needs and Methods for Foreign Students  
in Japanese Public School

何 欣芸 (Hsinyun Ho) 指導：菅野 純

## 【問題と目的】

1990年「出入国管理及び難民認定法」の改定により、子どもを同伴して日本に滞在する日系人を含めた外国人が増加している。外国人児童生徒が日本での学校生活に適應するには、日本語指導・教科指導といった教育的課題の他に、心理的課題も存在しているといわれている。外国人児童生徒の学校適應感・異文化適應に影響を及ぼす要因については様々な視点から検討が行われてきたが(e.g. 本間, 1996; 太田, 2000; 志水・清水, 2001; 趙, 2006), 具体的な支援体制や方法に結びつけることは容易ではなく、さらなる検討の余地があると窺える。また、「学校生活に対する満足度の主観的な心理状態」という学校適應感の定義からも、自己陳述のデータを伴った研究の蓄積も必要であると考えられる。そこで本研究では、外国人児童生徒が学校生活の中での困難感について、外国人児童生徒及び指導者にインタビュー調査を行うことにより検討することを目的とする。

## 【方法】

[研究Ⅰ] 対象：首都圏内在住の、外国籍かつ、来日して10年未満の子ども2名を対象とした。調査方法：半構造化面接を行った。分析方法：逐語録からコーディングを行い、概念を生成し、KJ法を参考にした手法でその概念をカテゴリ、サブカテゴリに集約した。

[研究Ⅱ] 対象：首都圏内在住の、10年以内に外国人児童生徒の指導に携わったことがある指導員6名を対象とした。調査方法・分析方法：研究Ⅰと同様。

## 【結果と考察】

[研究Ⅰ] 対象者ごとに、36～101個の概念が生成され、それぞれ2～5個のサブカテゴリおよび13～34個のカテゴリに集約された。このことにより、外国人児童生徒は、「友人関係」、「日本語学習」、「教科学習」、「精神面」、「担任教諭・日本語指導者とのコミュニケーション」において困難感を抱えていることが推測された。

「教科学習」においては、日本語による学習活動がうまく遂行できず、日本語が話せないゆえに指導者に質問をすることもできないことから、子どもにネガティブな感情が生起する可能性があるため、指導者が子どもに励ましの言葉かけを行ったり、子どもにとって質問しやすい雰囲気作

りを行うことが支援方法として挙げられる。また、「担任教諭・日本語指導者とのコミュニケーション」において、学習面や対人関係において困難感を感じ、家庭からのサポートも得られない子どもに対して、指導者の親身な関わりにより、子どもの活動意欲が保たれることにつながると考えられる。

[研究Ⅱ] 対象者ごとに、13～71個の概念が生成され、それぞれ0～6個のサブカテゴリおよび7～24個のカテゴリに集約された。このことから、指導者から見た子どもは「日本語学習」、「教科学習」において、困難感を抱えていることが示唆された。

それに対して、簡単な語彙やフレーズを子どもに繰り返して練習させることや、子どもに授業に参加できたことを実感できるように、目標設定に工夫していることが示された。このように、指導者が具体的かつ明確な目標設定をすることにより、子どもが学習における成功体験が得られ、学習や人との付き合いに対する苦手意識が減少し学校生活になじむことにつながると示唆される。また、指導者の「共感的姿勢」及びその働きかけは、子どもが日本での生活になじむことにおいて重要であると示唆される。

## 【総合考察】

子どものニーズと指導者の支援方法について、語りから直接的な関連が見られなかったが、研究ⅠとⅡの結果から以下のことが示唆される。

外国人児童生徒が来日して、学習や友人関係において困難感を感じると想定され、家族からのサポートが得られない可能性もあるため、子どもは指導者にサポートを求める。指導者が子どもに親身に関わって、子どもの話を傾聴し、周りに対して多文化理解の働きかけを行うことによって、子どもにポジティブな対人関係の経験が得られ、活動意欲が保たれるという結果につながると推測される。今後の課題として、研究協力者の個人属性を統制した事例の蓄積及び、本研究の知見である心理的サポートの妥当性の検証が挙げられる。